

# 日本クーベルタン委員会通信 (公開版)

第3号 2025年9月10日

編集・発行

日本ピエール・ド・クーベルタン委員会

事務局：〒438-0043 静岡県磐田市大原 1572 番地 1

静岡産業大学スポーツ科学部スポーツ科学科 和所泰史 気付

## 巻頭言

CJPC 通信第3号をお届けします。日本クーベルタン委員会副委員長の中塚義実です。私は、この3月で38年間務めた筑波大学附属高校を退職しました。週1回の大学非常勤に出校する以外は“ゆとり”をもって“遊び”を楽しむ毎日です。力を注ぐNPO 法人サロン2002を中心に、引き続き青少年の教育(オリンピック教育含む)や学校と地域、社会とスポーツのあり方に目を向けながら過ごしています。

教員生活を振り返ると、私の勤務校が日本のオリンピック教育の起点であったことを改めて感じます。明治～大正期の嘉納治五郎校長のもとで展開された東京高等師範学校附属中学の「全人教育」は、知・徳・体のバランスの取れた人間形成を目指すもので、学校行事や委員会、部活動などの多様な活動は「オリンピック教育」そのものだと言えるでしょう。

コロナ禍以降、学校現場が大きな変化に直面しているのを感じます。学校行事は縮小され、部活動改革は待たなしの状況です。AIとの向き合い方は、IOCがアジェンダにまとめたように人類共通の大きな課題です。皆さんと知見を共有しながら、東京2020以降のオリンピック教育のあり方を探っていきたいと思います。日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム2025は、11月8～9日に、オンラインと対面で開かれることになりました。

本号には、CJPCの運営報告に加え、パリ五輪についての寄稿文やスロバキアとの交流事業などが紹介されています。手に取ってお楽しみください。

(中塚義実)

## 再出発から1年半の足跡と今後の展望

田原淳子(日本クーベルタン委員会委員長)

会員の皆様のご協力のもと、日本ピエール・ド・クーベルタン委員会が再出発した2024年3月30日の総会から1年半が経過しました。この間、会則や規定の制定、銀行口座の開設、ロゴマークの改訂等、組織としての体裁を整え、事業としては、「日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」(以下、国内ユースフォーラム)の開催、本通信の発行、研究会の開催、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会との連携等を行ってまいりました。暫定運営委員会として始動した執行部は、2025年2月9日の総会において新たな運営委員7名が選出されました。

新体制になった今期(2025年2月9日～2028年総会まで)においては、従来の活動を継承しながら、さらなる充実・発展を目指します。今年是国内ユースフォーラムの開催時期を年末から11月8・9日に繰り上げ、「エクセレンス—いまの自分を乗り越える」をテーマにオリンピズムへの理解を深め、オンラインでケニアと繋いで異文化交流を推進します。また、ホームページの開設と法人化にも取り組みます。引き続き、会員の皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 運営委員会の発足

2025 年総会 (2025 年 2 月 9 日)、CJPC 運営委員候補者選考委員による選考結果にもとづき、運営委員として以下の方々が選出されました。CJPC 運営委員の任期は 3 年です。

青柳 秀幸、木村 華織、嶋崎 雅規、建石 真公子、田原 淳子、中塚 義実、來田 享子、和所 泰史

(計8名、50 音順)

## 「回想・パリ 2024 (中)」

昨 2024 年夏、パリで百年ぶりに開催されたオリンピック・パラリンピックに様々なお立場から関わりを持たれた会員の皆様に寄稿していただく本企画。第 2 回(中)は、取材で現地入りした二人のジャーナリストの回想をお届けする。多忙なスケジュールの合間をぬって、オリンピックの父、クーベルタン男爵の思いにふれる中から改めて見えてくるオリンピックの現実とは。

### 4. パリ大会が残したもの

松瀬学(日本体育大学教授・スポーツジャーナリスト)

2024 年夏のパリ・オリンピックを現場取材して、改めて 1 年延期・無観客の 2021 年夏の東京オリンピック・パラリンピックの不幸を考えた。

2024 年 8 月 13 日付の朝日新聞朝刊は一面でパリ・オリンピックの閉幕を伝え、見出しで「有観客・市民参加 祝祭感再び」と記した。記者の視点として、こうも冒頭に書いている。「<3 年前、コロナ禍の「無観客開催」だった日本から来た記者として、嫉妬すら覚えた>と。同感である。

パリ・オリンピックで、いくつかの競技会場をのぞけば、選手と観客の一体感と祝祭感を実感した。息づく敬意と感動、連帯。これぞ、「平和のお祭り」だった。

### クーベルタンの生家を訪ねて

僕は五輪期間中、競技の合間を縫って、近代オリンピックの生みの親、ピエール・ド・クーベルタン男爵の生家を訪ねた。市中心部のパリ 7 区のフォーブール・サンジェルマン西側界限ウディノ通り 20 番地。クリーム色の 3 階建ての建物の壁には、白い長方形のプレートにこう、刻まれていた。カラフルな五輪マークもあった。

<ピエール・ド・クーベルタン(1863- -1937) この地に生まれ、暮らした。教育学者、歴史家、人文主義者、そして、古代オリンピックを復興させ、IOC を創設した>

その生家の道路を挟んだ向かいには、フランスの LADOM(海外領土移動庁)のオフィスがあった。入口には、スタッフが立っていた。下手くそなフランス語で話しかけた。「クーベルタン男爵をご存知ですか?」と。

「ウィ」。トーゴ出身の身長 190 センチ、若い頃、バレーボールに打ち込んでいたロゴン・ヤナさんは人懐っこい笑顔で応えてくれた。

「オリンピック創設を熱心に呼びかけた人です。戦争からの復興には、教育改革が必要だと考えたのでしよう。スポーツと教育を通し、平和を実現しようと考えたのです」



クーベルタンの生家前にて・筆者(パリ・2024年8月)

### スポーツ教育を通じた平和建設の願い

フランスは、クーベルタン男爵の子ども頃、戦争で荒れていたという。だから、男爵は「平和な社会でなければ生きることができない」と考え、英国留学などを経て、スポーツ教育を通じた平和建設を目指したのだった。

ヤナさんは、「残念ながら、仕事をしているので五輪会場にはいけません」と言葉を足した。「でも、毎日、テレビで見えています。100年間、パリではオリンピックを開けなかったのが、パリ市民はいま、とても喜んで、興奮しています。クーベルタンに感謝しています」

クーベルタン男爵は「オリンピズム」という理念を広める手段として、オリンピックを創った。オリンピズムとは、世界平和の実現のため、スポーツを通じて心身ともに調和のとれた若者を育てること。また異なる国や地域の人との交流で、互いを尊重し、偏見をなくすことである。

もちろん、オリンピックに平和をつくる力などない。ただ、世の中が平和かどうか、平穏かどうかを測るバロメーター(指標)とは成りうる。

と同時に、平和を考える契機となる。ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルのパレスチナ攻撃などによる戦火の中、クーベルタン男爵の願いに思いをはせたのだった。

どだい、スポーツの持つ力で紛争のない世界の実現を目指すという『オリンピック休戦』はなぜ、順守されなかったのか。クーベルタン男爵は次の言葉を残している。<休戦という考えもオリンピズムの本質的要素です。だからこそ、その周期は厳格に守られなければなりません。オリンピックは人間の春を祝い、世代の継承をたたえる4年に一度の祭典なのです>

傍から見れば、IOCは「世界平和の建設に寄与する」というオリンピック運動を忘れ、政治とビジネスに走り過ぎているのではないかと疑念を抱く。オリンピック休戦を無視するイスラエルをなぜ、糾弾しなかったのだろう。IOCのバッハ会長は閉会式のスピーチで、「オリンピックは、戦争や紛争で分断された国同士であっても互いを尊重し、平和の文化をつくった」と述べたのだが。

## 男爵の肉声「4年に一度の開催を厳守せよ」。五輪憲章違反？1年延期の検証を。

2024年の暮れ、ひょんなことから、クーベルタン男爵の肉声を聞いた。ローザンヌのオリンピック・ミュージアムにあるもので、彼が亡くなる2年前の1935(昭和10)年、72歳の時の録音だった。ドイツのラジオのためにジュネーブで録音された演説の中で、「現代オリンピックの哲学的基盤」に焦点をあてたメッセージである。分かりやすいフランス語だった。

しわがれた声で、オリンピック開催の頻度、「キヤドリエナル(quadriennal=4年に一度の)」開催を厳守すべきだと訴えていた。争いが絶えなかった古代ギリシャで、休戦を促すために、4年を一周期とする古代ギリシャの暦(オリンピアード)にならって、オリンピックは4年に一度の開催を守らなければいけないとしたのだろう。

オリンピック憲章にも、<オリンピアード(オリンピック)競技大会は、オリンピアードの最初の年に開催される>と明記されている。すなわち、政治的、経済的な事情で1年延期となった東京オリンピックはクーベルタンの意思に反し、オリンピック憲章にも違反していることになる。

ならば、クーベルタン委員会の面々も、オリンピック関係者も、東京オリンピック・パラリンピックの「1年延期」の是非をしっかりと検証しなければならない。

## 5. 今こそ重みを増す 創始者の至言

稲垣 康介(朝日新聞編集委員)

今年3月、ギリシャ南部の高級リゾートで開かれた国際オリンピック委員会(IOC)総会取材した。昨夏のパリ五輪の閉幕から7カ月余りが過ぎたころ。コロナ禍が収まり、祝祭感が戻った祭典の記憶は、しだいに薄れつつある。

五輪を現地取材するのは、パリが夏冬あわせて11大会目だった。近代五輪を提唱したフランス人、ピエール・ド・クーベルタン男爵の存在抜きに、今の隆盛はない。

パリでの1世紀ぶりの開催だったこともあり、その功労者はフランス国民にどう思われているのかが、気になった。開幕前の6月、パリで生まれ育った友人、フローラン・ダバディさんに街を案内してもらいながら話を聞いた。彼はフィリップ・トルシエ監督時代(1998~2002年)のサッカー日本代表でフランス語と英語の通訳を務めた人だ。

### 「不適切」な男爵？

「クーベルタンのことは特に若い世代は誰も知らないんじゃないかな。学校の授業で取り上げられた記憶もないし。男女平等など人権の尊重が大事とされる現代の常識には合致しないから、タブー視されている面すらある」

たしかに、クーベルタンが生前残した言葉や文献からは、「女性差別主義」や「植民地主義」の思想がかぎ取れる。昨年、流行語大賞を受賞するなど話題を呼んだTBS系列のテレビドラマ「不適切にもほどがある！」では、昭和の時代から「コンプライアンス」が求められる令和にタイムスリップした男が、時代錯誤な言動を連発した。

男爵が生きた1世紀前と今の価値観を同じ尺度で論じるのは酷ではある。ただ、「あらゆる差別」のない社会を掲げるIOCとしては、伏せたい史実でもある。

パリでダバディさんに会う直前にスイスを訪ねた。ちょうど IOC 理事会が開かれるタイミングで、IOC 本部があるローザンヌへ。しかし、コロナ禍が明けても、かつてのような対面での記者会見は復活せず、オンラインでの対応だった。それならば、とスマホでバッハ会長のオンライン会見を聴きながら、IOC 本部の周囲を歩いた。

本部の裏庭に、「Ban Israel from Olympics Now(イスラエルを五輪から締め出せ)！」と大きく書かれた幕(画像)を貼ったグループがいて、その近くで警備員が目を光らせていた。IOC はウクライナに侵攻するロシアの選手に対しては「国の代表」という位置づけでの参加は認めず、個人資格の「中立選手」として受け入れることを容認する方針を打ち出していた。一方で、パレスチナ自治区ガザとイスラエルの紛争については、傍観の姿勢だった。



IOC 本部の外で行われたイスラエルの五輪参加に反対する抗議活動(2024 年6月)

### 亡くなった公園で巡らせた思い

IOC 本部からレマン湖畔と反対方向に歩いて5分ほどの墓地に、クーベルタンは眠る。彼の墓碑の前で、バッハ会長の質疑応答を Zoom で視聴した。古代ギリシャの流れをくむ「平和の祭典」の理想と現実との乖離をかみしめつつ。

私はクーベルタンの研究者ではない。スポーツ記者として、メダルをめざすアスリートの努力の軌跡に伴走して、それを「感動物語」に仕立てて記事にすることで満足していた年月が長い。日本選手に偏重した報道姿勢に違和感を覚え、世界の多様な選手のストーリーを書くことに主眼は移りつつあるけれど。

パリ大会を前に文献などを読んでみると、クーベルタンは五輪が商業主義、国家主義の過熱でひずみが顔を出す現状を予見していたかのような記述があった。自身が入り入れた「より速く、より高く、より強く」の標語が競争性をあおり、ときに勝利至上主義に陥るリスクを認識していた記述も残る。

ローザンヌに向かう途中、ジュネーブ駅からトラムで20分ほどのラ・グランジュ公園(Parc La Grange)に足を向けた。1937 年9月2日、74歳だったクーベルタンがこの公園を散策中に倒れ、急逝したといわれる場所だ。湖を望めるベンチに腰かけながら、1カ月後に控えるパリ五輪で書くべきテーマに頭を巡らせた。

ところが、だ。実際、パリ五輪が幕を開けると、いつも以上に怒濤の17日間だった。私が担当していたフ

エンシングでは日本勢が金メダル2個を含む5個のメダルを獲得した。そのなかでも、飯村一輝(慶大)、松山恭助(JTB)ら高校生時代から知る選手で構成された男子フルーレ団体の金メダルは感慨深かった。結局、これまで以上に、日本選手の記事を書くことに、多くの時間を割く結果になった。うれしい誤算とも言えるのだけれど、ジェンダー平等が実現した3度目のパリ五輪を、クーベルタンが示した諸価値と照らし合わせながら文章を紡ぐ、という点では消化不良だった。

## 新風の行方は

3月のギリシャでの IOC 会長選で当選したのは、ジンバブエ出身の41歳、カースティ・コベントリー氏だった。10代目で初の女性会長の誕生となる。IOC 創設から 130 年余の歳月をかけて到達した歴史的な一里塚だ。「時代を映す鏡」である五輪の中核である IOC に吹き込んだ新しい風の行方を見届けたい。

クーベルタンが託した自律、公正、連帯、平和などの教育的価値は、米国でトランプ大統領の2期目がスタートした今、未来への指標に、よりふさわしいと感じる。28年五輪の舞台はロサンゼルス。オリンピズムの崇高な理想の旗を降ろさない覚悟が、より強く問われていく。

(「回想・パリ 2024」は次号に続く)

## 新連載「クーベルタン学校」の素顔にふれる (1) スロバキア関係者の来訪

田原淳子(日本クーベルタン委員会委員長)

新学期が始まって間もない 2025 年 4 月 11 日、国土舘大学世田谷キャンパスにスロバキアのオリンピックムーブメント関係者 2 名の来訪を受けた。エレナ・マリコバ(Elena Malíková)氏(ヨーロッパオリンピック・アカデミー開発委員会委員、スロバキアオリンピック・アカデミー元会長)と、エバ・コルティチェリ(Eva Corticelli)氏(スロバキアのピエール・ド・クーベルタン・ギムナジウム・ピエシュチャニ校教諭)である。

ピエシュチャニ校は国際ピエール・ド・クーベルタン委員会(CIPC)が主導するピエール・ド・クーベルタン学校ネットワークのメンバーであり、2015 年に国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム(国際 YF)の第 10 回記念大会を地元の幹事校として開催した。

以来、彼女たちとは他国での国際 YF の機会やメールを通じて交流が続いてきた。また、ピエシュチャニ校では、現地の日本大使館の協力を得て、日本文化に因んだイベントもたびたび行われていたようである。

彼女たちの来訪日には、スロバキアで開催された前述の国際 YF で日本チーム引率教師を務めた中塚義実氏(CJPC 副委員長、筑波大学附属高等学校元教諭)も合流し、旧交を温めた。また、スロバキアにおいて日本文化の普及を強く支援してこられた元スロバキア駐日特命全権大使の中川真氏も来学し、日本とスロバキアの交流促進に再び一役買ってくださった。

昼食に釜飯を食べながらの懇談と施設見学の後、彼女らは旧知の国土舘高等学校も訪問し、生徒たちと共に書道、剣道、柔道などの日本の伝統文化を体験した。久方ぶりに対面での楽しいひとときを過ごし、オリンピックムーブメントに関わる両国の連携、相互理解、対話に一層の期待がもてた。

なお、同様のニュースは、以下の国際ピエール・ド・クーベルタン委員会のウェブサイトにも掲載された。高校での交流の様子など、写真も多く掲載されているので参照されたい。

<https://www.coubertin.org/2025/05/15/strengthening-japan-slovakia-ties-within-the-coubertin-school-framework/>

(『『クーベルタン学校』の素顔にふれる』は隔号で連載します)

## 会費の納入について

会費が未納入の方は、会費3,000円の納入をお願いします。また、ホームページの作成を行うため、寄付金1口5,000円を募っています。ご協力のほどお願いいたします。

なお、領収書が必要な場合は宛名と郵送先を事務局までお知らせください。

連絡先:事務局 和所泰史 [メール y-washo@ssu.ac.jp](mailto:y-washo@ssu.ac.jp)

銀行名:三菱 UFJ 銀行

支 店:豊田支店(店番 404)

預金種目:普通

口座番号:0831133

口座名:日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 委員長 田原淳子

## 入会案内

日本ピエール・ド・クーベルタン委員会への入会を希望される方には、こちらの入会フォームまたは事務局のメールアドレス(事務局 和所泰史 [メール y-washo@ssu.ac.jp](mailto:y-washo@ssu.ac.jp))をご案内(紹介)ください。



<https://forms.gle/MAM4PdLAPmRLjQpe6>

## お知らせ

次(第4)号では、「ユースフォーラム 2025」の報告のほか、寄稿「(仮)131年目の多様性の風～コベントリーIOC会長のリーダーシップ」(結城和香子会員)などを、通常の連載に加えて予定しております。

本通信へのご意見はもとより、今後の寄稿や研究会の企画について、このような方にこのような内容で原稿や発表を、といったご希望もぜひお寄せください。

連絡先:事務局 和所泰史 [メール y-washo@ssu.ac.jp](mailto:y-washo@ssu.ac.jp)